

友だより

前ページより
て、ご意見・ご質問等は古市支部賞にご連絡くださるようお願いしました。
新型コロナウイルスは終息することなく、当面は収束(2類から5類へ)になると考えられます。
我々、通信教育部卒業生は、並々ならぬ努力と苦勞の尊い経験を積んで、学士号を取得して

ヨーロッパを歩く(33)
ヴェルサイユ宮殿(3)
相談役 小西長之助



ヴェルサイユ宮殿のなかでの庄巻は、なんといつも豪華絢爛という表現がピッタリの鏡の廻廊だろう。
湾曲した天井は、ルイ14世の生涯を通じての事績が古代絵画の様式で、9枚の巨大な絵になって



▲パリエージュノパリ(フランス)

ます。昨今の新型コロナウイルス感染や母校の苦境を乗り越え、以前のようには皆様が熱心に母校愛に燃え、お互いに親睦を図りながら、昔の学生時代を思い出しつつ、熱心な討議と情報交換が行う、校友会活動が一日でも早くできることを願っています。
(文責:古市重喜)

四方八方ドイツ

木組みの家
村上まゆみ



ハルツ地方を旅しますと、ゴスラー・ヴェルニゲローデ・クヴェトリンブルクの木組みの家々に魅了されてしまいます。ゴスラーは、968年起源のランメルスベルク鉱山の銀・銅・鉛などの採掘によつて発展した町です。

11世紀に皇帝居城が建ち、旧市街には装飾豊かな木組みの家が立ち並び目を惹きます。またクヴェトリンブルクは、ドイツ初代の王ハインリッヒ二世縁の町であり中世より交易で栄えました。城山には12世紀の聖セルヴァティウス教会があり、マルクト広場周辺の美しい木組みの街並みを歩くと中世のお伽の世界に迷い込んだようです。此れ等の古都は戦災に合わず昔ながらの姿を留め、共にユネスコの世界文化遺産に登録されています。太古よりドイツの土地

は深い森で覆われていました。人々の生活は森に依存し、築き上げた木の文化を引き継いで来ましたが、しかし木材を大量に消費した結果森林資源は減少し、森林や木材の利用が制限されてしまいました。建築はログ構造から少量の木材で済む木組みへと変化します。地震の心配が無いため通し柱は使用せず、木材で作った箱を積み上げ鋸で固定して階層を作りました。壁が建物を支えるため、木材の内側に切り石・煉瓦・木の枝などをギッシリ詰め漆喰で固めて強度な壁を作りました。また木組みに短い枝分かれした幹も利用して色々な模様を現しました。

中世後期はなお木造家屋が街並みを形作っていました。市壁に囲まれた限られた土地に、間口より奥行きが長い多層の家屋が建込み、上階の床面積を上げるために片持ち梁で張り出しを作りました。二階は仕事場や調理場として使い、上階は住居でした。屋根裏部屋は倉庫で荷物を切妻破風に取り付けた滑車で上げました。また上階部分の重量を支えたり、火災予防のために一階を石造りにした家屋もあります。城・教会・市壁など町の重要な建造物は戦災や火災から守るため逸早く建築に高さが60mの市庁舎の塔に上るとワイングラスの影をかけた旧市街を一望する事が出来ます。また歴史的ホテルやレストランに入ると、古い家具と室内装飾に惹き付けられます。ローテンブルクの観光は景観だけではなく、例えは聖ヤコブ教会の宗教芸術、中世犯罪博物館のドイツの法律と刑罰に関する資料、郷土博物館の歴史的资料などこの町の観光内容は多彩です。その他ロマンティック街道上のディンケルスビュール・ネルトリンゲンなどでは、小規模ながら戦災を免れた特徴ある市壁と木組みの家を見る事が出来ます。

東西ドイツ統一後の1990年に設立された木組みの家街道は、98の町を7つのコースに分け繋いでいます。北はエルベ川河口から、南はボーデン湖に至る6州に跨り全長3000kmにも及びます。3000kmにも及びます。建築用の石材が乏しく且つ近代の波に乗り遅れた田舎の町に、民家として残る木組みの家への愛着は、根強いドイツの木の文化を感じさせます。その多様な様式と有機的な構造は、今後もドイツを訪れる観光客の目を惹きつけてくれると思います。

会報98号掲載
記事の訂正
第98号5~6ページ
掲載の村上まゆみ氏の
投稿記事のタイトルに
誤植がありました。次
の通り訂正してお詫び
いたします。



▲鏡の廻廊(ヴェルサイユ宮殿)

この廻廊は、王と王妃の寝殿間の通路となっていたが、もともとは特別レセプションの場だった。諸外国の元首や使節を迎えるの公式謁見もここで行われた。また、王族の婚礼の際の舞踏会の会場にもなったという。
王朝が消滅した後も、有名なヴェルサイユ条約の調印式など重要な行事はここで行われた。今でも、フランス大統領が外国元首を迎えるとき、この廻廊を使用しているという。
《鏡の廻廊》の隣にある《王妃の間》は、ルイ14世王妃から16世王妃マリー・アントワネットまで3代の王妃が使っていた寝室である。まさに黄金づくめで、調度品はマリー・アントワネット時代の《夏の調度品》と呼ばれるものを、壁布とともにそのまま復元しているという。
女性ガイドのフランス語での説明を記念のために録音していたら見つかってしまった。著作権によるものと思うが、権利意識が強いフランス人のきびしさが身に沁みだ。
《聖別の間》には、フランスの宮殿画家ジャック・ルイ・ダヴィッドの「皇帝ナポレオン1世の聖別式と皇妃ジョセフィーヌの戴冠式」の絵がある。昨日ルーヴルで観た絵と全く同じもので、これは2作目だという。縦6.1メートル、横9.3メートルの大作を2作も描いたバイタリテイには驚嘆した。
宮殿内のレストランで遅い昼食をとり、正殿の西側に広がる庭園へ。そこに《水の前庭》と呼ばれる2つの泉水がある。泉水の周囲は大理石で縁どられ、その上に、それぞれフランスの代表的な河川の精の像、水の精の像、こどもたちの精の像がずらりと並んでおり、シャッターを切りまくる。そのあと《大運河》のそばまで行ったが、時間がなくなりすぐに引き返し、15時過ぎに宮殿を出た。
このあとエッフェル塔へ登り、さらにセーヌ川の観光船に乗るため、今朝乗ってきた高速郊外鉄道の駅へ急ぐ。

1 図書館機能は、どう変わってきたか
図書館の歴史は古く、紀元前7世紀にはアッシリアに粘土板の図書館があり、また古代最大の図書館といわれるアレクサンドリアの図書館には、紀元前3世紀にはすでに所蔵資料の目録が備えられていた。人類の文化遺産の記録を集積した図書館は、長い間ごく少数の人たちが研究のために利用するもので、今日のようには、あらゆる人々が自由に資料に接することができるようになったのは、19世紀後半の公共図書館の成立以降のことである。
図書館を構成する要素は、「資料」、それを利用する「利用者」、資料を整理・保存して利用に供するためのテクニカルサービスと、場としての「施設」がある。「施設」には資料と利用者をつなぐ役割を果たす「図書館員」がおり、図書館の機能を実現する活動を行っている。
図書館の機能は、メディアの発達・歴史と共により、その性格を進展させている。
その大きな転換点は、紙の発明と印刷技術の融合によるもので、「大量の出版が可能となると、一部限られた人々から宗教を通じ経典の印刷物が多く出回るなど、口述からテキストへの固定と知識の集約と体系化が活発し

2 変わらない点は
図書館の歴史は、口承からテキスト、さらに音声、画像、電子に固定される。次ページに続く